

ニューヨーク補習授業校

平成二十六年(二〇一四)年度

卒業式特集号

2015年5月16日発行
56 Harrison Street
204 New Rochelle
NY 10801

平成二十六年(二〇一四)年度卒業証書授与式

平成二十七年三月十五日(日)午前十時十五分から、ニューヨーク補習授業校の卒業証書授与式が、アルバート・レオナルド ミドルスクールで行われました。

式は厳粛な雰囲気の中にも、例年同様卒業証書授与の折に観客席から拍手や掛け声が飛び交うなど、補習授業校らしい卒業式となりました。

卒業生の皆さんは、緊張した中にも晴れやかで自信に満ちた表情で式に臨み、初等部四十六名・中等部二十一名・高等部十二名、計七十九名が巣立っていききました。

ここに紹介する「送辞」「答辞」には、代表者の児童・生徒だけでなく、補習授業校に学ぶすべての子どもたちの、これまでに経験してきた様々な体験や苦勞、そして深い思いが凝縮されています。

楽しかったこと、苦しかったこと、そして悲しかったことなど、列席したすべての人が、その一言一言に共感し、時には涙をさそわれる場面もあり、会場は感動に包み込まれました。

今回の補習校だよりを通して、補習授業校の教育の原点と魅力をあらためて考えるきっかけとしていただければ幸いです。



| L I 校初等部 6年1組 | L I 校中等部 3年 | L I 校高等部 2年 | W校初等部 6年1組 | W校初等部 6年2組 | W校中等部 3年 | W校高等部 2年 |
|-------------------|----------------|------------------|---------------|---------------|-------------|----------------|
| フィッシュマン 岩元 富士弥 | 江川 葵 | 蘆田 怜 | 荒井 海生 | 阿部 純子 | 阿部 紘子 | アキスキー 中村 実奈 |
| 服部 亜珠実 | 藤木 世音 | フィッシュマン 岩元 武蔵 | 荒木 翔満 | アソニー 英雄 | 安倍 野映 | ハガソ ありそん |
| 平野 真修 | 藤森 空 | 藤田 京 | ヒュム アテイア 奈月 | 池田 裕次郎 | ショバ 志文 | 松浦 玲七 |
| ジョンソン ナル | 笠井 大暉 | 春日 嗣人 | 福地 絵実莉 | 伊丹 瑠菜 | 長谷川 瑛己 | 立石 恵利也 |
| 門田 梨花 | カイザー 嶺 | カイザー 玉青 | 本澤 世成 | 伊藤 なたり | 伊丹 勇太 | |
| マドセン サラ | 北川 滯那 | 柴田 奈央美 | 石井 美那 | 勝野 空詩 | 岩佐 佳奈 | |
| 宮澤 伶央 | 柴田 奈々枝 | 島 太郎 | 岩佐 俊希 | 是永 陸 | 小椋 樹 | |
| モンターク 鈴音 | 豊田 真琴 | 篠原 照代 | 金原 初花 | 中畑 龍馬 | 小野 元暉 | |
| 大宮 周磨 | 上野 絵里沙 | | 木谷 希望 | 尾形 湧音 | 鹿内 颯太 | |
| 柳光 蛍 | 山崎 摩哉 | | 松浦 亮太 | 小椋 夏葵 | 山口 香蓮 | |
| サクリバンテ アンジエロ | 笠井 大暉 | | 長濱 ショーン | 奥山 智美 | 山本 理紗 | |
| 多喜 ウィリアム | | | 鳴瀧 奏美 | ポーター 恵史加 | | |
| 滝澤 真佳 | | | 大井 里香 | 櫻井 心太郎 | | |
| 戸田 遙 | | | パルメリ ケシー | 谷垣 早来 | | |
| | | | スパークス 実亜 | 山岸 ホルデン | | |
| | | | 豊村 真帆 | | | |
| | | | 上田 真愛 | | | |

在校生代表 W校高等部一年 鈴木 元騎

卒業する先輩方へ

「ありがとうございます。」

僕はこの言葉をずっと伝えたいと思っていましたが、なかなか言うことが出来ず、「この卒業まで来てしまいました。でも今回このような機会を与えられ、ようやく皆さんに感謝の気持ちを伝えることが出来ます。」

高等部に入った初日、緊張していました。ほかの学年と授業を共に受けるのは初めてで怒られたらどうしようとも思いました。しかし高一の先輩方と共に同じ教室で過ごすようになつてからは、そんな心配も吹き飛びました。みんな優しく接しやすい人たちがばかりで、逆に補習校生活がとても楽しみに思うようになりました。

そんな先輩達と過ごしたこの一年で学んだことがあります。それは責任感です。責任感といっても色々ありますが、僕が学んだのは上級生としての責任とその責任感です。「これまで四年間、補習校のあらゆる行事に参加し、クワスの出し物を作るなどのことはやってきましたが高等部になつてからは自分達のクワスのことだけではなく、他の学年との連携、また球技大会、夏祭り、蚤の市、冬祭り、百人一首大会などの中高の行事全体のこととも企画したり、グルプリーダーとして色々考えていかなければならぬことが多くなつたり、とても大変でした。しかしこんなに大変なのにもかかわらず高一の先輩達は余裕な顔でもくもくと仕事をしています。僕は、あ、かっこいいな。」「自分もあんな風になりたいな。」と思いました。先輩達は僕の憧れの人たちです。

そんな卒業生の皆さんに最後に感謝の気持ちを込めて、ある言葉を紹介します。「人生は道路のようなものだ。一番の近道はたいてい一番悪い道である。」これは知識は力なり」の名言で有名なイギリスの哲学者、フランシス ベーコンの残した言葉です。僕が四、五年前、初めてこの言葉を聞いたときは、え、近道の方が楽だし、遠回りする意味なんてあるの?」と思いました。最近になってそれは間違だつたと思つたようになりました。人から見ても、自分から見ても無意味なことだと思つたの方がもしかしたら大切なのかなと今は思えます。例えば、小学生、下校の時、遠回りして帰つたとなんか、誰にでもあると思います。大人から見れば何でもなつてますが、その時は自分にとっては冒険で、それまで知らなかつた新しい発見

があつたなんていうこともあつたはずですよ。これから大学生になり、社会人になって毎日同じことを繰り返すような日々を送らなければならぬ時が来るとき、人間は楽な方、楽な方へ道を選んでしまいかちになるでしょう。フランシス ベーコンの言葉でそんな時に遠回りをしてみれば、気づかなにか新しいことが起きるかもしれない、見かかるともいれない、と僕たちに教えているのだと思います。卒業生の皆さんももし近道を通りたくなつた時、そしてさらに人生の中で色々な選択をしなければならなくなつた時、この言葉を思い出し、遠回りをしてみてください。思つてもみながたす、ことが起こり、そして新しい人生の道が見つかるかもしれません。

卒業生の皆さんはこれからの日本、アメリカ、そして世界で活躍していく方々です。今胸に秘めてある自分の夢、あるいはこれから見つけるであろう自分の夢、これらを達成するまで、いろんな道が出てくると思っています。ですが、決して近道を通らず、ゆくりと前進していきたくて、僕たちが在校生は勇敢に「この道を歩く皆さんを心から尊敬し、その後をまた歩いて行くでしょう。先輩たちのことを決して忘れません。」

卒業おめでとうになります。そして本当にありがとうございます。

これからも補習校での学びを忘れずに頑張ってください。

答 辞 (一)

W校初等部卒業生代表 豊村 真帆

今から七年前の四月、桜咲く季節に私はニューヨーク補習校の門をくぐりました。

幼児部、日本であれば幼稚園の年長組です。新しい筆箱とノートをいれた新品のバックパックを背負つてクラスに行くこと、そこには担任の先生が笑顔で待っていて下さりました。青いチューリップの名札を着けて緊張しながら自分の席に着いたのを昨日の事のように思い出します。最初はよそよそしかったクラスメートたちとも時間がたつにつれ仲良くなれたことや、餅つき大会、カレー作り、七夕などの楽しかった思い出が、七年経つた今でも忘れられません。

三年生の時、漢字テストではとても苦労しました。二年生までは得意だった漢字テストが、三年生の時には苦手になってしまいました。それは、先生が止め、払い、線の長さや角度にとっても厳しく、なかなか百点をくれなかつたためです。

こんなにがんばってるのに何で？と何度も思いました。今は漢字テストで毎回満点はとれませんが、あの時の厳しさのおかげでお手本通り正確に書くことと思うようになりました。

五年生の時には百人一首かるたに初めてふれる機会ができました。かるたの札は昔のかなづかいで書かれていてまるで外国語のようで意味はちんぷんかんぷんでした。でも、意味は分からなくても歌を覚える事は出来ました。クラス対抗のかるた大会は白熱してとても楽しかったです。

最高学年の六年生になった九月に、現地校でミドルスクールの七年生に進級しました。この頃から現地校と補習校の勉強の大変さを身にしみて感じるようになりました。現地校の宿題やプロジェクトが増え、補習校の宿題が追いつかなくなり始めたのです。先生に相談すると、遅くなくてもいいので必ずやりとげるようにと言って下さいました。おかげでなんとか宿題をこなす事ができました。習い事、勉強、現地校と補習校の宿題に追われながら補習校に通う大変さは実際に通っている私たちにしか理解出来ない事です。しかし、初等部での努力は将来必ずむくわれると思っています。

大変な思い出ばかりのように聞こえますが、そんなことはありません。六年生での一番の思い出は、やはり運動会です。ずっとやってみたかった応援合戦に参加できる事がうれしくて毎週の厳しい練習も苦になりませんでした。組み体操は運動会当日まで練習し、迎えた本番で大成を収め、この仲間たちと頑張っただけでこれだけ本当によかったと嬉しく思いました。

また、この七年間の間には学年途中で帰国していく仲間を送り出すという、現地校では感じることはないさびしさも何度も経験しました。しかし、限られた時間しかすこせない仲間だから一緒にいる時間を大切にしたいという強い思いは、補習校に通っているからこそ芽生えた気持ちだと感じているのは私だけではないと思います。

私たちは中等部に進む者、進まない者、それぞれの道を歩みますが、初等部で学んだ事や楽しかった思い出を胸に、それぞれの目標に向かって一層努力して行こうと思います。

先生方には日本人として必要な国語、現地校でも役に立つ算数の勉強を教えてくださいました。週一回の授業であるにも関わらず、日本の学校に通った事のな私に日本の同年代の子たちに負けない位の学力を持つ事ができたのは、毎週熱心に教えて下さった先生方のおかげです。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、七年間、毎週欠かさず送り迎えしてくれた両親に感謝します。ありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います。

答辞(II)

上校初等部卒業生代表 戸田 遥

冬の間に積もっていた道はたの雪もとけてきたこのころ、このような素晴らしい卒業式を多くの来賓の方々や先生方、そして家族にあたたかく祝っていただけの事を、とても嬉しく思っています。

私は補習校へ年長の時から通い始めましたが、二年生の時に一度退学をしました。しかし、今、こうしてこの卒業式の中で答辞を読ませていただいています。

二年生の時、私は現地校で三年生となり、毎週金曜日に出されるたくさんの宿題を、週末にしなくてはなりません。それまでは現地校での宿題はあまり多くなく、補習校の勉強と両方出来ていたのですが、だんだんと友達と遊ぶ時間さえもなくなっていきました。ただ毎日が学校、勉強、プロジェクトのくり返して、一週間が過ぎていき、私は本当にくたくたになってしまいました。とうとう机に向かうと涙が出てきて、何もしたくなくなり、何も出来なくなってしまうました。そんな私を見た母は、

「補習校を休んで、ゆっくりしてみよう。」

と言ってくれました。私はただうなずき、土曜日をゆっくりと過ごしました。週末が自由になった私は、現地校の事だけに集中でき、友達と遊ぶ時間も持てるようになり、心はだんだんと楽になっていきました。先生は母と連絡を取り合ってくれていたようですが、いつの頃からか私は、

「もう、補習校には戻らない。」

そう決めていました。

それから二年が過ぎ、二人の妹達が幼児部に通い始めました。私は両親と一緒に妹達を毎週土曜日に、補習校へ見送りに行きました。すぐ下の妹の担任の先生は、私が年長の時に教わった先生だったので、時々、母とクラスのお手伝いをさせていただきました。そんなある日、先生は

「遥ちゃんも、補習校に戻ってくればいいのに。」

と言って下さいました。実はちょうどその頃、私も補習校に通う妹達をうらや

3
ましく思い、戻りたいと思っていました。そして、私が四年生の二学期に、家族

と話し合い、補習校に戻ることを決めました。

しかし、二年間のフランクは、私が思っていた以上に大きなものでした。二年前の私は、誰よりも早く手をあげ、答えることができたのに、先生の質問に答えられない自分が、すごくいやでした。クラスのみんなはちゃんと理解して、授業にも付いていけているのに、私は一人取り残されたような気がして、とても悲しく、つらく感じました。でも、

「自分が戻りたいと言ったのだから、今さらやめたいとは言えない。」

必死でクラスになれようがんばりました。元々、知っているクラスメートなので、休けい時間が、ほどとする時間でした。とにかくなれるしかない、がんばるしかありませんでした。五年生になったころには、少しずつ授業も楽しくなってきました。

そんなある日、妹が学校を辞めたいと言い出しました。私は、自分の経験を話し、その時の苦しみを伝えました。

「ぜったい補習校を辞めてはいけない。今がすごく大変で苦しいのなら、両親に手伝ってもらい、先生に相談をして続ける道を探せばいい。何とかなるよ。」

私の言葉で、妹は思いどどまり、またがんばり始めてくれました。

補習校はただ日本語を勉強するだけのところではないと思います。みんな現地校と補習校を両立させて、アメリカで生活をしています。両方の学校の勉強を両立させるのは本当に大変ですが、日本人の両親の間に生まれ、アメリカで育っている私は、日本語と英語で学び続けたいと思っています。私達が通う補習校は、同じような状況の中でがんばっている仲間と悩みを語り、支えあえる大切な場所です。いつかきつと、がんばってきても良かったと思える日がくる事を信じて、中等部へ進んでいきたいと思えます。

本日は、ご来賓の方々をはじめ、校長先生、在校生の方からの温かいお言葉をいただき、卒業生を代表してお礼を申し上げます。ありがとうございます

答辞(III)

W校中等部卒業生代表 阿部 紘子

いつまでも遠いような気がしていた卒業式を今迎えて、私は中学生生活がここで終わってしまうのだと、ひしと実感しています。今日は、私たちが中学生として過ごす最後の日です。

振り返ってみれば、この三年間は、楽しいことも辛いこともいろいろな出来事が積み重なった非常に充実した日々でした。

私は初等部を卒業するギリギリまで、中等部に進学するかしないのか、決められずにいました。やめたかった気持ちの主な理由は、土曜日に寝坊ができないことと、補習校から出る宿題に時間がかかるから大変ということでした。それにもかかわらず進学を決めた理由は、中等部部の先輩達みたいになれるかもしれないという期待でした。

私は小学六年生の時、中高生徒会がやっていた、のみの市というファンドレイジング活動に行きました。食べ物や中古品を売り、その売上金を寄付することを目的とした生徒会活動のひとつです。中等部では、のみの市などの活動を生徒が企画実行することになっています。私は、のみの市で働く先輩方を見て感動しました。丁寧に人を案内していたり、会計をしていたり、私の目に映った先輩方はみんな一生懸命でした。私と数年しか年齢は変わらないのに、先輩方がすごく大人に見えました。そして、私もこうなってみたくて、進学を決意しました。

こうして先輩方に憧れて進学した私ですが、実際にのみの市などの活動を企画実行するのは想像以上に大変でした。しかし、大変なだけにやりがいがありました。中二の時は、メニュー決めから始めました。予算内に収まって、人気のあるメニューという難しい条件をクリアしたのが、タピオカバブルティーです。実は、試験会をすれば、飲み放題ができるという下心が大きくありました。チャイナタウンから安いタピオカを調達してきたり、太いストローを探したり、と大変でしたが、「行ける！」と確信したときはとてもうれしかったです。当日は、早々と売り切れるほど人気でした。

三年生のフルーツポンチのときは、会計係りもやりました。ウエブで最安値のフルーツ缶を探したのに、店に行ったら売ってなかったこともありました。それで

も、みんなで買い物を担当して、のみの市に間に合わせました。先生方からもいろいろアイデアをいただき、クラス一丸となって企画しました。

生徒会活動や行事だけでなく学習面でも、私は新しい経験をし、成長することが出来ました。国語の授業では、新しく古文と漢文について学びました。最初は複雑な文法や言い回しに戸惑い、全くといっていいほど理解できませんでした。しかし、授業を聞いて知識を深め、読めるようになってくると、見たことのない日本語の魅力に段々と惹かれていきました。中国から伝わった漢字が、日本独特の仮名文字に発達し、今私たちが使っている日本語につながったと思うと感慨深いものがありました。

三年間そばで見守って、私たちを支えてくれた先生方、私たちがこの三年間全力で走ってこれたのは、先生方のサポートがあったからです。悲しいとき、困ったとき、苦しいとき、一緒に悩んでくれました。そして私たちが間違っただとき、正してくれました。私たちが一生懸命だと、先生方も一生懸命になってくれました。先生方は、私たちの誇りです。

保護者の方々へ。嫌がる私たちを親として補習校に通わせてくれてありがとうございます。毎週の送り迎えに力をお願いしました。色々な経験をたくさんしました。伝えきれないことも沢山ありますが、勉強だけじゃない、大切な経験をしました。私たちは成長しました。

私たちの中には進級する人もいれば、辞める人もいます。これからは、列々の道を行って行くでしょう。このニューヨーク補習校で、みんなで過ごした中等部生活は私の大切な財産です。この卒業式を分岐点に、私たちは補習校で学んだことを胸に抱き、それぞれの信じる未来へと踏み出します。

答辞(Ⅳ)

Ｌー校中等部卒業生代表 江川 葵

十一年前の春、私は今日と同じように、補習校のステージに立って、幼児部の年中に入学しました。四歳の私には補習校でどれだけ最高の学校生活が待っているのか、想像もつきませんでした。十一年間も補習校に通い続けた私は、中学三年になって、やっと気づきました。この学校は私にとって必要不可欠な存在です。

もちろん補習校は日本語を勉強するのが一番の目的ですが、これだけでは

補習校を語れません。「ケーキをおいしくしてくれる砂糖のように、学校での生活を明るくしてくれるのは私の大切なクラスメートたちです。」私のクラスは最強に仲がいいです。私たちを見る保護者達には「中三はみんな本当に仲が良ね。」とよくいわれます。自分でもその理由がはつきりしていません。よくよく考えてみると、一つだけ気がついたことがあります。それは、みんなそれぞれ違う個性だということです。でもちがうからこそ良さがあります。私たちはまるで家族のようです。父親みたいに新聞を読んでいて、クラスのことをいつも見守ってくれる笠井君。いつもだらだらしているけれど、数学の授業になると頭の良さが表れる弟たちの空とまや。いつもため息をついていて、でも天才な兄の嶺。いつも明るくてクラスのことを一番気にしてくれるもう一人の兄、世音。アニメと漫画が大好きで、物静かな妹のななえちゃん。性格が正反対で、でも二人とも可愛くて心の優しい妹のようなレナとまこち。最後に私の双子のかたわれ、クレイジーな絵里。ひとりひとりが家族の一員としての役割を持っています。本当の家族みたいに、時に大きなけんかが起こることもあります。でもけんかをしたところで、私たちの絆(きずな)は切れません。家族だからこそみんなで解決できます。お互いに助け合い、信用し合えるのが家族の意味だと思います。

そんな私のもう一つの家族との一番心に残る思い出は、毎年行われる運動会です。毎年毎年私のクラスメートたちとの関係がさらに強くなります。また、中三の仲間とだけではなく、ほかの生徒と交流できる機会でもあります。応援団などで、先輩たちに色々教えてもらったり、後輩たちに私たちがいると教えてあげたりする、大切な日です。運動会で、協力することの大切さや、お互いを支えあう大切さを私たちは学んでいると思います。私たちの先輩たちにごで感謝の気持ちを送りたいです。いつもみんなをサポートしてくれてありがとうございます。今まで先輩方が私たちを導いてきてくれたように、これからは、私たちが後輩を見守り導き、支えていけるようにがんばります。後輩が私たちを信用してくれて、うまくサポートができるような先輩になりたいと思います。来年の運動会もＬー校の伝統を守り、みんなで団結してがんばりたいと思います。

まだ感謝を伝えたい大切な人たちがいます。まずは私の本当の家族です。毎日遅くまで家族のために働いてくれて、補習校に通わせてくれるお父さん。毎週補習校に朝早くから送り迎えしてくれて本当にありがとうございます。これから高等部に通う間よろしくお願いします。朝からおいしいお弁当を作っ

でくれるお母さん。補習校で起こったことにたいして、相談に乗ってくれたり、私のくだらない話を聞いてくれたりします。朝早く補習校に遅れないように起こしてくれる妹。ものすごくうるさいけれど、一緒にいると結構楽しいです。最後に私の双子の姉たちに感謝をしたいです。幼児部の年中から入り、高等部を卒業した二人からは、本当に多くのアドバイスを受けました。二人とも補習校が大好きで、いつも「高校まで絶対つづけた方がいいよ」と私に言い続けてくれました。二人はアメリカ育ちですが現在、日本の大学で学んでいます。それは補習校での学習の積み重ねがあったからだと思います。この場を借りて私を支えてくれるすべての人に感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございます。

先生方には、いつも熱心な指導をしていただきました。中学で教わった大森先生、潮見先生、矢部先生、岡本先生、親身になって、未熟な私たちの手助けをして下さった、先生方の愛は計り知れません。いつもニコニコしていて、クラスを盛り上げてくれる担任の森先生。こんな中三でしたが、最後の最後までみんなを見守って、補習校に通い続けたくなる環境を作ってくれて、先生方のおかげで中三の私たちはここまで成長できたと思います。ありがとうございます。

それから私のもう一つ家族の中三のみんな。個性豊かで心優しい、みんなのおかげで最高に楽しい日々を送ることができました。これからさらに一緒にいられる中三のクラスメートもいますが、卒業して別の道を歩むクラスメートもいます。でもここで終わりではありません。私たちには、家族の絆があるので一緒に一緒に授業を受けなくても、いつまでも絆が切れることはありません。高等部に入學してから私たちの関係がもっと強くなってほしいです。

これからも、この仲間とたくさん笑い、助け合って、時には本音でケンカもして頑張っていきます。この補習校で最高の仲間、いえ、家族と出会えたことを誇りに思います。

答辞 (V)

W校高等部卒業生代表 ハナガン ありそん

私たち高等部卒業生は今日で補習校最後の日を迎えました。高一卒業のこの日まで私たちは辛抱強くこの長い道のりを歩いてきたと思います。

振り返ってみると、中学生、高校生の頃の私には、日本語が大きな支えでした。

片親が外国人の家庭では、大抵二つの言語が使われることが多いと思います。しかし、私の家では、父がアメリカ人なのにも関わらず日本語が話せるので、ずっと日本語で会話がされてきました。そのため私の英語力は中学生になってもあまり上達しませんでした。生まれも育ちもアメリカなのに、全日の学校から現地校へ転校した時、私はひどいカルチャーショックを受けました。今までと違う環境、言語、常識に私は順応しきれませんでした。今思い返せばそれは普通のアメリカの学校だったのだ、と思えるのですが、小学生だったその時の私には相当なショックでした。

私は元々読書が好きでしたが、現地校に嫌気がさしてからは日本語の本を読む時間が以前より増えました。そんな私にとって、補習校はいくらでも日本語の本が借りられる素晴らしい場所でした。ここで出会えた数々の本は、私を色々な所へ連れて行ってくれたと同時に、日本語の素晴らしさも教えてくれました。そんな魅力のある補習校でも、補習校へ通いだした始めの一年間は本以外には魅力も感じられず、あまり意味がないと思っていました。特に友達もできなかったし、休日が一日なくなってしまうことに私はその時は納得ができていませんでした。しかし、補習校で過ごす年月が増えてくると、友達もできて、自分の居場所を見いだすことができました。中学校、高校に入っても完全に現地校の環境にとけ込めていなかった私にとって、補習校は居心地のよい場所になりました。補習校のクラスメートは皆優しく、また授業もとてもおもしろいものでした。学校行事や生徒会活動など、楽しみは学年が上がるたびに増えていき、そのうち土曜日補習校へ通う事が私の生活の欠かせない一部になってきました。

もし補習校という場所がなければ、私は多くのクラスメート達とは出会えなかつたでしょう。住む所、通う学校、趣味や特技が異なる私たちが一つひとつで会う事ができたのは、皆日本語習得という大きな目標があったからです。さらに、一人違う経験を持つ仲間だったからこそ、クラスメート達から聞く話が新鮮で、私にはとても興味深いものでした。補習校は、こうして私を全然違う世界に住んでいられる人たちの架け橋ともなってくれたのです。

私は日本語の本を通してたくさんのおもしろい興味を持ち、自分の視野を広げる喜びができました。日本語だからこそ表現できる言回しなどに感動できたことも、アメリカでは特に貴重な日本語の本が読み放題にできたことも、すべて補習校のおかげです。百人一首を楽しんだり生徒会活動を通して自分たちの行事を企画、運営したりできたことも思い出です。

6
補習校で、私はもう一人の自分を発見しました。クラスメイトや先生達と日本語で笑い合ったり、尊敬できる先輩と一緒に授業を受けお互いに意見を言ったりできた事も、もし補習校に来ていなかったら、できなかったでしょう。自分とはだれかを狭い世界観から決めつけていたかもしれない。補習校に来ることで、たくさん自分の長所や短所を見つかることができました。そうして補習校の活動を通して見つけた自分の新しい一面は、自分を見つめ直し、知るきっかけとなりました。卒業後、私たちの土曜日は休日に戻ります。もう補習校に通えなくなるのは非常に残念ですが、ここで経験できた様々なことはこれからの私たちの大きな支えになるでしょう。

答辞(Ⅵ)

ー校高等部卒業生代表 篠原照代

ついに、私がこの卒業式で答辞を読む日が来ました。十一年間通い続けたニエーヨーク補習校。「キセキ」、「絆」、「刻む」の三つの「き」が始まる。この言葉は、私達ー校高等部二年。クラスを象徴するキーワードです。

私が中等部へ進学しようと決めたのは、父との話し合いの結果でしたが、それでも中学二年生まで補習校へ通うことがとても嫌でした。思い返すと私達は、初等部の時からいろいろな児童がやめたり、転校したり、日本へ帰る仲間達がいったりと、変動の多いクラスでした。でも、今、ここに座っているみんなは、最後まで共に貴重な土曜日を過ごした仲間です。ワイワイさわいさわり、ランチの時に宿題を助け合ったりした仲間です。この仲間がいたからこそ、私が十一年間の補習校生活を楽しみ越えられたと思っています。この八人と出会えた事、そして最後まで残ったことは本当に「キセキ」です。

私達のクラスの「絆」が深まったのは、中学二年の時でした。国語の授業で習った「走れメロス」を元にした劇。皆で力を合わせて制作しました。「メロンメロス」と、ロディにした劇は、大反響で生徒、保護者、先生方からの多くの賞賛の言葉を頂きました。そこにたどり着くまで、意見の食い違いなどの問題がありましたが、皆の意見を聞きながら、力を合わせたからこそ、劇は、大成功になったのだと思います。そして、何よりも、皆で力を合わせ、問題を乗り越えたからこそ、私達の絆がもっと深まったのです。それ以降、毎年、私達のクラスは、卒業生

を祝う会で劇をする事になりました。中二の「メロンメロス」、中三の「メロン太郎」、高一の「ドラえもん」。そして今年は、総合国語で習った着物を着て、日舞を踊り、「浦島太郎」ならぬ、「魚島太郎」の劇で締めくくりました。

年を追う度に、私達の絆はどんどん深まっただけでなく、気がつけば、皆それぞれに日本大好き「オタク」になっていました。休み時間中には最近見たアニメ、読んだ漫画などの話をして盛り上がっていました。日本の文化、漫画、アニメ、ドラマ、音楽が大好きなんです。そのことも更に私達の「絆」を深めました。

振り返れば、今年は予期せぬ出来事が多い年でした。まず、四月に十何年かぶりに女性の生徒会長が選ばれました。六月に行われた運動会では、初めて赤組と白組が同点になりました。過去の運動会で、同点になるとは、誰も予想出来なかった出来事でした。また、最後の最後に、借りている校舎が、都合により二月二十八日までしか使用できず、私達の補習校生活は、W校よりも二回早く終わりました。ハプニング続きだったこの一年は私達の記憶にしっかりと「刻まれ」ました。

「キセキ」

「キズナ」

「キザム」

この三つのキーワード。

「キセキ」的に残った8人がこんなに深い「絆」で結ばれ、ハプニングを乗り越えた共通の記憶が「刻められた」クラス。

私達は、ここ補習校へ通った事を決して忘れません。補習校で学んだ事、出会った人たち、思い出は、一生の宝物です。まだ補習校に通い続けたいかどうか迷っている後輩達、歯を食いしばって涙流しながら、鼻水をたらして、通い続けてください。絶対に後悔しません。私が保証します。こんな素晴らしい補習校に通わせてくれた両親、毎週、私達生徒より早く来て授業準備をする先生方、いつもそばにいてくれる仲間たち、面倒を見てくれた卒業した先輩方、私達の背中を見ながら進んでいる後輩達に、今は感謝の気持ちでいっぱいです。

お母さん、お父さん、ありがとうございます。

先生方、ありがとうございます。

補習校ありがとう！

それでは、最後に、いつもの挨拶を。ー校高等部二年！ 全員起立、気をつけ、礼。

先生、さようなら。
皆さん、さようなら。
また、いつか。